

大阪北部地震 そのとき、生徒は

中1社会科 竹原英司

大阪北部地震の発生

6月18日(月)の7時58分、大阪府北部の高槻市付近を震央として、マグニチュード6.1の地震が起こった。地震の規模自体はそれほど大きなものではなかったが、内陸型の地震で地下浅いところで起こったため、各地の揺れは大きく、高槻市や茨木市などで震度6弱を観測した。本校の所在する吹田市でも震度5強を観測した。

人的被害を見ると、大阪府内で5名の方が亡くなられ、2府5県で400名以上の方が負傷された。建物被害でも、12棟の全壊をはじめ、4万棟以上が損壊した。

私自身の経験では、1995年の阪神・淡路大震災時のほうが揺れの程度・揺れの時間とも大きく、また長かったが、それに次ぐ大きな地震であった。

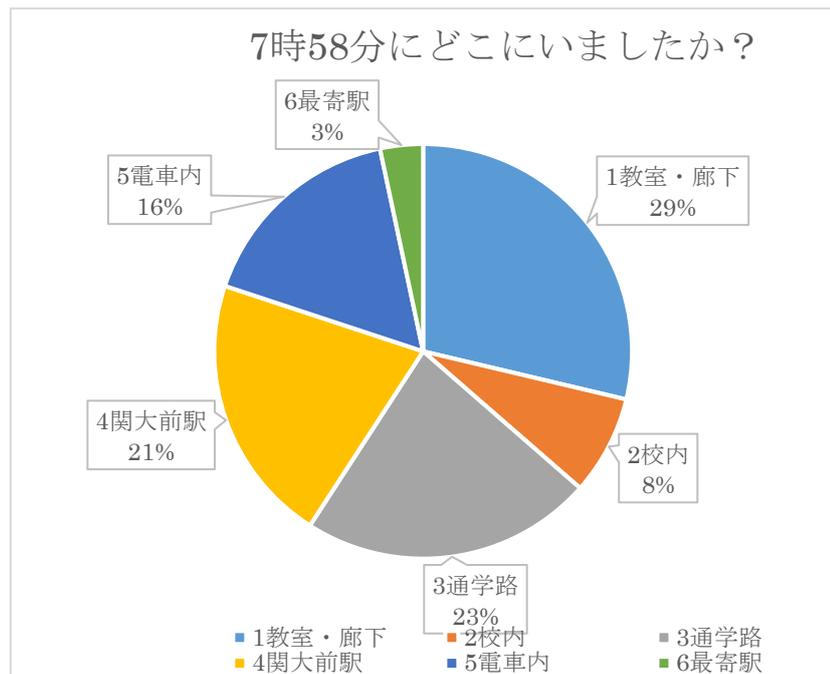
阪神・淡路大震災は早朝に起こったため、長野県の野沢温泉でスキー修学旅行中であった高校2年生以外の生徒は自宅にいた。それに比べ、今回は始業時刻前の生徒登校時に発生したため、生徒の所在はさまざまで、学校の対応も難しい面があった。

地震後の7月10日に、中学1年生は夏期特別授業で、神戸市にある「人と防災未来センター」で防災学習を行ったが、その時のワークシートの一部に、大阪北部地震時の様子を書ける生徒に書いてもらった。そのワークシートをもとに、本稿では地震発生時の生徒の様子を知り、浮かび上がった問題点や今後対策すべきことを考えてみたい。

7時58分に、中1生徒はどこにいたのか？ どうしたのか？

181名の中学1年生の回答をもとに、分類してみた。28.7%の生徒は教室または廊下など、中学校舎内にいた。7.7%の生徒は中学校舎から秀麗の道を経て、中高正門に至る校内の屋外にいた。合わせて4割弱の生徒は校内にいたことになる。

22.7%の生徒は、中高正門から幼稚園前を



経て関大前駅までの校外の通学路にいた。21%の生徒は関大前駅内にいた。関大前駅内から正門までの校外の通学路に、半数近くの生徒がいたことになる。

電車内にいた生徒は 16.6%、自転車利用など、上記以外の場所にいた生徒が 3.3%であった。

その時の生徒の様子、思ったことはどうであったか。扇形校舎内、校内、駅～正門の通学路、関大前駅とそれぞれの場所ごとの生徒の記述の一部を抜粋する。

【扇形校舎内】

- ・教室にいた。滑って転びそうになった。悲鳴が聞こえた。机の下に隠れた。
- ・校舎の階段を上がっていた。立ってられず、うずくまった。先生の声が聞こえ、すぐさま逃げた。
- ・ロッカーの前にいた。揺れた瞬間に地震だとわかった。教室に戻らないと廊下の窓ガラスが割れると思ったが動けなかった。学校に来てよかったと思った。友達の様子を見て安心した。
- ・教室にいた。隣のクラスのほうからゴーツと音がして、それから1秒後？に揺れ出した。
- ・教室にいた。机の下に隠れた。10秒くらい揺れた。
- ・教室にいた。後ろから爆発音が聞こえ、揺れ始めたので机の下に入った。先生が来てくれた。放送で「外に出てください」と言われたので、急いで外に出た。
- ・ロッカーのところにいる。教室に入って机の下にもぐり、放送がなるのを待ち、指示が出ると急いで外に出た。
- ・教室にいた。机の下に隠れた。悲鳴が聞こえた。

【学校敷地内 屋外(秀麗の道など)】

- ・秀麗館よこの階段を上がっていた。補助バッグを頭に載せた。高校グラウンドに避難した。その後、中学グラウンド→秀麗館B2に避難した。
- ・秀麗の道を歩いていたら急に地震が来た。その場にいたひとはしゃがみ込んでいた。グラウンドに避難した。
- ・秀麗館横の階段を上がっていたら、秀麗館がゴーツとなって、そっちを見たら縦に揺れてこけた。何が起こったのか一瞬わからなかった。グラウンドに避難した。

【関大前駅から正門まで】

- ・友達と一緒に歩いていた。怖くて泣きそうで、友達のバッグにつかまった。
- ・電線や電柱が揺れ出し、下から突き上げられるような揺れが起きた。立ち尽くすことしかできなかった。
- ・幼稚園前から正門のところにいる。大きな音の後に強い揺れが起きた。

【関大前駅内】

- ・関大前駅に着いたとたん、すごい音になって、揺れ出した。みんなうずくまり悲鳴を上げて

いた。みんな怖さで足がふるえていたので、みんなと手を握りながら階段を下りた。

- 関大前駅に着いて電車から降りた直後に地震が来た。とっさにしゃがんだ。改札が通れなかった。
- 関大前駅で電車を降りた瞬間、いきなり駅の柱が揺れ、ゴーッという音とともに地震が来た。走って外に出た。

【電車の中で】

- ドンッと揺れた。その時は風かなと思っていたら近くのスマホが急になりだした。(2時間後に)電車から降りられることになり、最寄り駅まで歩いた。一高の先生がいて、スマホを借りて親に連絡をした。
- 駅に止まって、とびらが閉まる瞬間に地震が起こった。駅前の公衆電話は使えなかった。歩いて学校に行こうとして、公園で休憩していたら親切な人が家の電話を貸してくれ、親に電話をして12時半に駅に迎えに来てもらった。
- 電車内で地震警報が鳴り響いて、とてもこわかった。地震があったと車内放送があった。(4時間後に)避難誘導が行われ、近くの駅まで歩いて行った。(8時間後に)電車が復旧し、家に帰った。
- 電車全体が大きく揺れた。地震を知らせる音が鳴り、電車が止まった。(3時間後に)電車からはしごで降り、線路の上を歩いて最寄り駅まで歩いた。(4時間半後)やっと自宅近くの駅に着き、親に迎えに来てもらった。
- 電車が止まった。(3時間後に)電車から降りた。どうすればよいか迷って、動いていた地下鉄線の駅から電車に乗って家に帰った。
- 電車が急に揺れて止まった。(2時間後に)電車から降りて、最寄り駅まで行った。一高の先生がいて、親と連絡がとれて帰ることができた。

校舎内にいた生徒の多くは、地震に怖がりながらも机の下にもぐり、身の安全を確保する行動をとることができた。その後、教員の指示に従ってグラウンドに避難している。今回は校舎の損壊がなかったこともあるが、慣れた場所で安全を確保する行動ができ、そばに友人がいて、教員の指示に従って避難するという、安全確保という観点からは一番良い状況であった。

それに対して、校内の屋外では、高校生のグラウンドへの避難の流れにのるという行動が多くみられた。グラウンドに向かうという行動自体は適切であると思われるが、指示がよくわからないまま流れにのっての避難行動は状況によっては危険性をともなうこともある。

関大前駅から正門への通学路では、とりあえずよく知っている学校に向かうという行動が全員にみられた。

一番大変であったのは電車内に閉じ込められてしまったケースで、2~4時間は車内から出られなかった。ようやく電車から降りられて最寄り駅まで歩いて、その後どうしてよいかわからず、途方に暮れる状況であった。たまたま教員が居合わせた駅では、教員の指示のもと、帰宅

にむけて冷静に行動できたことがうかがえる。非常時に大人の関係者が身近にいると安心できることがわかる。

今回は 7 時 58 分の地震であったが、これが授業中だったら、放課後であったら、校舎が損壊したら、けがをしてしまったら、それぞれで状況は大きく違ってくる。当然、とるべき避難行動も変わってくる。本校では専門家のアドバイスを受けて「防災マニュアル」を作成し、毎年改訂をしているが、実際に地震が起こるとマニュアル通りにはいかないことも多かった。しかし、マニュアルがあるからこそ、校内にいた生徒に対しては、マニュアルを基本としつつ、その場の状況に応じて避難行動を指示することができたと思う。

その一方で、電車内等において保護者、教員がサポートできない場合、生徒は途方に暮れてしまう。その対策として、緊急時に備えて携帯電話の所持を暫定的に認める措置が行われたが、もちろんそれだけで済むわけではない。避難マニュアルをさらに改訂していく一方で、学校と家庭のどちらにもいない生徒が、自分で考えて安全を確保できる力を養っていくことも必要であると思われる。

2018 年 9 月には、台風 21 号が「非常に強い」勢力のまま神戸市付近に上陸し、近畿地方で 8 名の方が亡くなるなど、暴風や高潮により大きな被害が出た。このような自然災害はこれからも必ず起こる。自然災害発生時に、生徒が自らの安全を確保することができるようになるために、学校全体で防災学習を進めていくことの必要性を強く訴えたいと思う。